

大平さんの思想

新井俊三

大平さんの思想はまことに多彩で、東西の思想をいくつも消化して形成されており、私はよくダイヤモンドの多角的な輝きに譬えております。しかもその思想をつくり上げるまでに、永い年月をかけて自らの体験を幾層にも積み重ね、ついに自分のものとしておられます。例えば、大平さんは「自由主義者」で知られておりますが、その「自由の精神」たるやまことに筋金入りのものです。

大平さんは学生るとき、恩師上田辰之助教授をはじめ錚々たる教授からきびしい薫陶を受けておられますが、殊に学校生活を経験された昭和の初めから昭和十一年の間は、日本が全体主義と軍国主義へ急角度に傾斜していた時代です。そういう時代を背景に、多感な若き日の大平さんの血潮が「自由主義」の思想に強く影響されたことは想像に難くありません。社会人になられてからまもなく、昭和十四、五年の頃、興亜院の若手官僚として内蒙古の張家口に赴任しておられますが、このとき大平さんは、晩年の環太平洋構想のきっかけをつかむと共に、現地のインフレ、統制による二重価格の実情を見て、自由こそ経済の本質を支えるものだとの信念をもたれたものと推察されます。その後政界に入られ、やがて次々と枢要なポストを歴任され、最後に総理になられたわけですが、経済に対する姿勢は、自由主義を貫くことに終始されました。それも永年に亙って熟成された大平さんの信念の吐露であります。

それから大平さんの基本思想である「永遠の今」「歴史的現実」については、昭和十五、六年頃に田辺元

博士の著書を読まれているわけですが、それから三十年、大平さんは孜孜として「歴史的現実」を実践されていたのです。昭和四十五年、大平さんは『歴史的現実 われわれの生き方』を書かれています。あの難解な田辺博士の著書の内容を僅か三、四頁の短文に、ご自分の表現で、ご自分の思想として要約されており。私が見るところでは、本を読まれてからの三十年の永い間、それをめぐっての思索と実践をこつこつと続けられ、ようやく晩年になって一文に纏められたものと考えております。「明日は枯れるとわかっている朝顔にも心をこめて朝晩水をやる」気持は、永遠の今、歴史的現実の心であるし、すべてのごことはプロセスが大事だという思想も、一瞬一刻の中に永遠が秘められている「永遠の今」に源流があります。

さて、大平さんの自由の思想は、ひろく西欧的ロゴスへの理解ともいえると思います。世界の首脳、カーター氏、シュミット氏、ジスカール・デスタン氏等と胸襟を開いて遺憾なく世界情勢を語り合えたのも、基本においてその人達と共通に持ち得た西欧的な認識、思考形式にあつたことは間違ひありません。近代化にはじまる現代の日本が、いまや近代を超えた時代にはばたこつとしておるとき、正にその緒をつかんだ指導者が文人宰相大平正芳であつたことは、誠に歴史の意義ある一頁であつたと私は考えております。

大平さんは老荘思想をよく理解したといわれますが、たしかに大平さんの思想の中にある無常観あるいは無の諦観には、老荘への共感があると思います。しかし、政治家としての姿勢では、むしろ儒教的ないわば端正な現実的理念が強く現われていたのではないのでしょうか。

いずれにせよ、大平さんの思想には必ずご自分で納得のいくまでの思索と体験の積み重ねがあつたわけで、その言動のひとつひとつにどっしりとした重味と深味が感じられたのも故あるかなと、あらためて追慕と哀悼の念に堪えない次第であります。

(新井経済研究所長)